

旺文社

標準
漢和辭典

赤塚 忠 監修

新版

旺文社

標準
漢和辭典

赤塚 忠 監修

—— 新版 ——



旺文社編

◆旺文社の事業◆

旺文社は雑誌・書籍・教科書の出版をはじめ、教育放送や通信教育もおこなっている、典型的な最も信頼されている「教育のための出版社」です。

事業	放送	新聞	ト カ セ ン 教材	事 典	書 籍	雑 誌
旺進模 文国学 社積芸 児童立 文コン 学ブク 賞ラ ンリス ト	大学 受 験 ラ ジ オ 講 座	中小 学 学 習 時 時 代 代 新 聞	学語 習 カ カ セ セ ツ ツ ト	学教科 芸別 百習 科大事 事典 (ジュニア・エボカ)	美術・ 文庫・ 児童・ 書・教 童・科 学・書 習・ス ポ・語 ーッ 図書 鑑	高中小 高二小 一校生 二校生 時生 代向 代向 代向 代向 ス テ ッ プ
						高高二 一校生 二校生 時生 代向 代向 代向 代向 ス テ ッ プ
						中中中 二二二 三三三 時時時 代代代 代代代 代代代 ス テ ッ プ
						小小小 六六六 五五五 時時時 代代代 代代代 代代代 ス テ ッ プ
						小 六 五 時 代 代 代 ス テ ッ プ

(関連団体) 旺文社インターナショナル(国際誌の刊行)
財団法人 日本英語教育協会(通信教育・雑誌・放送)
財団法人 日本 L L 教育センター(LL教室)
日 本 学 生 会 館(学生のホテル)

□「旺文社案内」または「図書案内」(小、中、高一一般別)進呈。〒162 東京都新宿区横寺町 旺文社

旺文社 標準漢和辞典

1968年 1月10日 初版発行
1979年 11月 1日 新版発行
1980年 重版発行

編 者 旺 文 社
発 行 者 立 澤 節 朗
印 刷 所 共同印刷株式会社
付物印刷所 開成印刷株式会社
製 本 所 荒木製本株式会社
製 函 所 清水印刷紙工株式会社

発 行 所 株式会社 旺 文 社
162 東京都新宿区横寺町
(編集) 03-266-6356
電話 (販売) 03-266-6416

乱丁・落丁はお取りかえしますので本社に直接お申し出ください。

6581 725-04 0724 E

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

©旺文社 1979

Printed in Japan

目次

監修者のことば	一	(一) 漢字の知識	九四二
刊行にあたり	二	(1) 漢字のおこり 九四三	
この辞典の内容と使い方	四	(2) 字体の変遷 九四三	
本文	八一～九四〇	(3) 漢字のなりたち 九四三	
音訓索引	一二	(4) 漢字の音訓 九四七	
総画索引	六〇	(5) 漢字のおもな部首 九四九	
助字一覧	九七八	(二) 熟語の組み立て	九五〇
漢詩索引	九八〇	(三) 漢字の筆順	九五二
故事・熟語・成句索引	九八二	(四) 国語の書き表し方	九五四
人名・書名索引	九八六	(1) 現代仮名づかい 九五四	
同訓異字・同音異義語索引	九八八	(2) 送り仮名の付け方 九五四	
		(3) 漢字について 九五七	
		(4) かたかなを用いる語 九五八	
		(5) 符号の用い方 九五八	
		(五) 漢文の読み方	九六〇
		(1) 漢語の組み立て 九六二	
		(2) 送り仮名・返り点 九六一	
		(3) 訓読しない文字 九六二	
		(4) 返読文字 九六二	
		(5) 再読文字 九六三	
		(6) 基本の句形 九六三	
		(六) 中国文化史年表	九六八
		(七) 新旧字体対照表	九七六

刊行にあたり

辞書は学習の指針となるものです。若くて知識欲のさかんみなさんは、ぜひ自分の目的にかなった信頼できる辞書をたえず手もとにおいて、知識を習得し、豊かな教養を身につけていただきたいものです。

この「標準漢和辞典」は、とくに中学生・高校生のみなさんが、漢字・国語・漢文を学習するうえで、じゅうぶん活用できるように豊富な内容を盛っております。また全体にわたり学習本位の解説を徹底させ、しかも見やすく、引きやすく、使いやすい理想的な漢和辞典とするよう心がけました。この辞典は、一九六八年に初版を刊行し、その後、一九七四年には、新「送り仮名の付け方」等を採用して改訂を行いました。今回はさらに全面改訂して、従来の特色である学習性をより強くうち出しました。今回の改訂の主な点をあげると、学習項目の大幅増、部首別索引の新設、筆順の拡充、助字・漢詩・主要人名・書名それぞれの索引新設、親字を追加、語句の全般的みなおしなどで、内容全体に充実、正確を期しました。また新たに実施される「常用漢字表」案を全面的に採用し、文字どおり最新の内容を盛り込んだ漢和辞典として、みなさんのこれからの学習にすみずみまで役だつようにしました。本書の特色を整理して次に示しましょう。

一、国語・初級漢文、およびその他の科目の学習にじゅうぶん役だつ親字約五千、語・句約四万を採録

中学生、高校一・二年生の学習に必要な漢字・漢字熟語・一般漢語のほかに、故事・成句・ことわざ、中国・日本の主要な人名・書名・地名、有名漢詩の全文など、今までの辞典にない広い範囲の語や句を収めてあります。

二、「常用漢字表」案に準拠した新音訓と新送り仮名を全面的に採用

新しく実施される「常用漢字表」案を全面的に採用、新「送り仮名の付け方」とあわせて、現代の最も標準的な書き表し方を示しました。親字の下の音訓(読み)らんでも「常用漢字表」案により、認められているものは太字で表し、送り仮名も示しました。

三、漢字の成り立ちと正しい字義がわかる解字らん、正しい書き順が一目でわかる筆順らん

重要な漢字については、解字らんで、その漢字の最初の字形やその後の移りかわりを説明して、漢字を興味深く合理的に覚えらるるようになっています。また、文部省の「筆順指導の手びき」をもとに、正しい書き順をかかげました。

四、やさしくわかりやすい語釈・説明

監修者のことば

私たち日本人は漢字とそれをもとにしてつくられた仮名文字で国語を書き表します。漢字や漢語はすでに千数百年にわたって、わが国の人々の生活に密着し、日常のことばとなり、国の文化をきずいてきました。祖先から受けつがれてきた伝統ある文化を深く理解するにも、今日、お互いの意志を自由に通じ合うにも、漢字の知識なしにはすまされません。

私たちがふだん使っている漢字は、昔ほど多くはありません。一九四六年に当用漢字表が定められ、日常生活一般に使用する漢字に制限が加えられました。だれにもわかり使えるように、多すぎる漢字を合理的に整理することは必要なことです。一方、この制限で世間に漢字軽視の傾向が生じ、とくに若い人たちの漢字・漢語の知識の減退だけでなく、文章表現・思考能力の低下さえ心配されることになりました。

日本人として豊かな教養を身につけるためには、正しい国語力が必要です。そのためには漢字・漢語の学習を欠くことはできません。とくに、いま、じゅうぶんな知識を吸収し、将来に向かって伸びてゆこうというみなさんのためには、学習の基準となる平易で、しかも正確で詳しい、学習本位につくられた漢和辞典がぜひ必要です。そうした考えから、中学生からよくわかるよう配慮して編集した「旺文社標準漢和辞典」を一九六八年にはじめて世に出しました。この辞典は表記がわかりやすく、解説が親切に徹していることで非常な好評を得て、多くの方々に愛用されてきました。その後、一九七四年に、新しい「送り仮名の付け方」を採用するなど、いっそうの充実をはかって改訂を行いました。

今回の改訂では、学習本位という本書の最大の特色をさらに強化して、内容全体に検討を加え、引きやすさを考え、また学習のための各項目を拡充するなど、中学生から学習に直接役だつ漢和辞典“として、多くの新しい内容を盛り込みました。さらに、新たに実施される「常用漢字表」案を全面的にとりいれ、最新の内容をもった漢和辞典といたしました。中学生・高校生のみなさんが、いつもこの辞典を愛用して、漢字・漢語の正しい知識を身につけ、豊かな教養をそなえて未来に限りなく伸びてゆかれるようせつに希望します。

一九七九年

初秋

文学博士

赤塚忠

親字・熟語の語釈や説明は、だれにでも理解できるようやさしく、とくに基本的な意味や一般的な意味はもらさず示してあります。また、同じ意味の語、反対または対になる語をかかげて、語の意味をいっそう理解しやすくしました。

一、親字・熟語のとくに注意すべき点や、いろいろの関連事項を説明した独自の「注意学習参考」らん

語釈や説明のほかに、「注意学習参考」らんを設けて、親字・熟語について字体や意味を誤らないように注意したり、似た字や語どうしの書き分け、使い分けについて説明したり、そのほか、親字・熟語に関連したいっさいの知識を解説しました。

一、その部首に所属する全親字が一目でわかる部首索引

部首見出しのはじめに、それぞれの部首に所属する漢字群のおもな性質と、部首内の全親字が一覧できるように索引を示しました。また、部首をまちがえやすい漢字をまとめてかかげ、正しく引きなおすことができるようにしてあります。

一、故事・熟語・成句や人名・書名・漢詩などの学習に便利な索引

国語や漢文では、故事・熟語・成句はとくに重要なので、これらを本文に収めて解説すると同時に、学習しやすいよう巻末にこれらの語を五十音順にならべて本文のページを示しました。また、本文には重要な人名・書名、有名な漢詩をのせて解説し、巻末にそれぞれの索引・一覧をかかげて本文のページを示したので、漢詩・漢文の学習に役だてられます。

一、漢字・漢文についてのまとまった知識が得られる有益な付録

付録には、「漢字の知識」をはじめ、中学生・高校生の国語・漢文学習に欠かせない基本的なことから順序だててわかりやすく解説してあります。また、現代の標準的な国語の書き表し方についても説明してあります。

以上のように、この「旺文社標準漢和辞典」は、かずかずの特色をそなえておりますので、じゅうぶんに活用していただきたいと思います。

おわりに、この辞典の企画編集から完成にいたるまで、熱心に監修の労をおとりいただいた赤塚忠博士、ならびに執筆と校正にとくに協力をもたらった次の先生がたにあつくお礼を申し上げます。

小和田顯、泉隆武、上原信義、小沢由正、川嶋優、北野勝也、小柳敏志、妹尾勇、水沢竜夫（敬称略）

旺文社社長

赤塚忠

この辞典の内容と使い方

一、この辞典の構成

親 字

〈収録字数〉 約五、〇〇〇字

- (ア) 常用漢字(教育漢字をふくむ)
- (イ) 人名用漢字
- (ウ) そのほか、学習・社会生活に必要な漢字
- (エ) 右の(ア)の異体字、及び旧字体

話・句

〈収録語数〉 約四〇、〇〇〇語

- (ア) 小学校上級・中学校の国語教科書にあらわれる漢語・漢字熟語・成句、及び高等学校の国語・漢文の教科書にあらわれる漢語・漢字熟語・成句の基礎的なもの
- (イ) 新聞・雑誌、そのほか日常生活にあらわれる一般漢字熟語
- (ウ) 動植物名・百科語
- (エ) 故事・成句・ことわざ
- (オ) 中国・日本の主要な人名・書名・地名・国名・官職名
- (カ) 中国の有名な漢詩

注リ(ア)「常用漢字」は、昭和五十四年三月に中間答申として報告された「常用漢字表案」による。(イ)「人名用漢字」は昭和二十六年及び昭和五十一年に内閣告示された「人名用漢字別表」「人名用漢字追加表」による。

索 引

- (1) 音訓索引 親字の音または訓がわかっているときに用いる。親字の音及び訓を五十音順にならべた索引。
- (2) 総画索引 親字の音訓などがわからないときに用いる。親字を総画数の順に分けてならべた索引。
- (3) 部首索引 親字の部首がわかっているときに用いる。
- (4) 部首別索引 本文ページの中で部首ごとにその部首に所属する親字を本文と同じ順序にならべた索引。
- (5) 漢詩索引 本文におさめてある漢詩を、詩題・起句・詩人名の三種に分けて、それぞれ五十音順にならべた索引。
- (6) 故事・熟語・成句索引 本文におさめてある故事・熟語・成句のうち、おもなものを選んで五十音順にならべた索引。
- (7) 人名・書名索引 本文におさめてある人名と書名のうち、おもなものをそれぞれ五十音順にならべた索引。
- (8) 同訓異字・同音異義語索引 本文「学習欄」で、解説してある同訓異字・同音異義語を、それぞれ五十音順にならべた索引。
- (9) 助字一覧 親字「学習欄」で解説してある助字をその用法別に分けて、ページを示した一覧。

付 録

付録には、国語を書き表す場合の資料と解説を、また、漢字及び初級漢文を学ぶ上に必要な事がらを載せた。

- (一) 漢字の知識
- (二) 熟語の組み立て
- (三) 漢字の筆順
- (四) 漢文の読み方
- (五) 中国文化史年表
- (六) 新旧字体対照表
- (七) 四国語の書き表し方

二、この辞典のきまり

親字について

1. 配列

- (1) 部首を設けて(原則として「康熙字典」の例に従う)漢字を分類し、部首の画数順に配列した。ただし、新字体となつて、従来の部首では引きにくくなつた漢字については、了・ク・ハ・ナなどのように新しい部首を設けてそこに移し、従来の部首をもあわせて示した。
- (2) 各部の漢字は、部首を除いた画数の少ないものを先に、同じ画数内では代表的な字音(国字は訓)の五十音順に配列した。
- (3) 以上のほか、引くための便宜を考え、旧字体・異体字などをその該当する画数の後に、一括して次のように加けた。

(例) 旧字体で、新字体との差が著しいものは読みとともに、その新字体と解説のあるページ(漢数字)・段数(算用数字)を示した。

例 入⁶〔兩⁸〕(リョウ) ふたつ 二⁵〔両⁴〕(リョウ)の旧字体

(例) 異体字のうち、特に重要なものは読みとともに、親字と解説のあるページ・段数、及びその親字との関係を示した。

例 冫⁷〔涌¹⁰〕(ユウ) わく 一⁹〔湧¹⁰〕(ユウ)の正字

一⁹〔做¹¹〕(サク) つくる 一¹⁵〔作¹³〕(サ)の俗字

金⁶〔鋳¹⁴〕(テツ) くろがね 金⁵〔鉄¹⁴〕(テツ)の古字

この辞典の内容と使い方

2. 部首の標示

- (1) 各部のはじめに、その部の共通した構成要素の部首の実際の形と名称(心⁴・忄⁴・忝⁴・忝⁴など)をかけた、部首としてのはたきやその部に属する漢字の特徴など、共通する事からの概略を解説した。

例

4 心⁴ (こころ) 忄⁴ (しん) 忝⁴ (しん) 部

▽「心」をもとにしてできていて、「精神作用」に関係する文字を集めた。漢字の偏(へん)になるときは「忄(三画)」、脚の部分になるときは「忝(四画)」の形になる。

- (2) 部首解説のあとには、その部首に所属する漢字を部首内の画数順にならべ、そのページ数を示した。なお、引くための便宜を考え、その漢字の上に部首を除く画数を示した。
- (3) さらにゆらんを設けて、あやまってその部首から引かれると思われる漢字の正しい部首とそのページ数をも示した。

山³〔嶋¹⁴〕(トウ) しま 山⁷〔島¹³〕(シマ)と同字

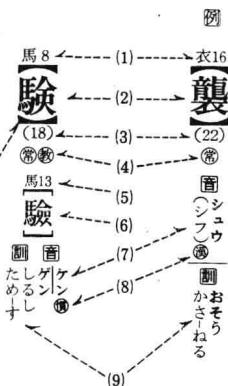
なお、本辞典では、異体字の名称を次のような基準で区別した。
正字……その文字の成り立ちや移り変わりの上で正式な字形として認められてきたもの。

俗字……もとの字形がまちがって変わったり、かんたんな字形にしてまにあわせたりして使われているもの。

古字……古い時代に作られたが、のちにふつうには使われなくなったもの。

同字……その文字の別な字形として、どちらも古くから使われているもの。

親字の見出し
親字の見出しは、次のような体裁に従ってかかげた。



所屬部首と画數 親字の所屬部首の形と部首を除いた画數を示す。
親字 提出親字を示す。
総画數

漢字の種別 常用漢字は【】、それ以外の漢字は【】で示した。

また、教育漢字はさらにの記号を重ねて【】とし、人名用漢字はの記号をつけて【】とし、その区分を示した。

なお、「常用漢字表」にあつて「当用漢字表」にない字(95字)には、※をつけて【】※とし、「当用漢字表」にあつて「常用漢字

表」にない字(19字)は*印をつけて、【】*とした。

(5) 旧字体の部首と画數

旧字の字体 著しく字形の異なる旧字体があるものは、その部首と画數もあわせて字形をかかげた。ただし、部首も画數も変わらな

いものは、その字形だけをかかげた。

(7) 字音

親字の音は、画の下に片かなで現代仮名づかいによつて示し、歴史的仮名づかいのあるものは(一)に入れてその下に示した。

(4) 「常用漢字表」に示された音は太字で示し、特別な、または用法のごくせまい音には傍線をつけて示した。

(ウ) 「常用漢字表」に示されていない音、また常用漢字以外の漢字の音は細字で示した。

(8) 字音の区別

親字の音は、慣用音・漢音・吳音・唐音の順に示したが、その親字の広く一般に使われている音はつねに最初にかかげた。

(4) 音種の別は次のような記号で区別した。

⑤……慣用音 ⑥……漢音 ⑦……吳音 ⑧……唐音

なお、漢音・吳音が共通するもの、ならびにいずれの音に属するかがはっきりしないものについては、この区別を省いた。

(9) 字訓

親字の訓は、画の下にひらがなで現代仮名づかいによつて示した。

(4) 「常用漢字表」に示された訓は、その漢字の部分を太字、送り仮名の部分を細字で示した。また、用法のせまい訓には傍線をつけて示した。

(ウ) 「常用漢字表」に示されていない訓、また常用漢字以外の漢字の訓は細字で示し、送り仮名はハイフン(一)で区切つて示した。

4. 筆順

常用漢字・人名用漢字、そのほか特に筆順のあやまりやすいと思われる漢字には、最高八段階までの筆順を示した。教育漢字は文部省の筆順指導の手びきに従い、ほかの漢字もこれにもとづいた。

5. 解字

漢字への親しみと、漢字の理解をはかるため、漢字のなりたちを六書(象形・指事・会意・形声・転注・仮借、ただし、転注・仮借は漢字のなりたちとは関係ないで用いない)によって説明した。

(1) 解字の説明は、すべて旧字体のものを対象とし、新字体については旧字体との関係を「略体」または「もと俗字」などと示した。

(2) 必要に応じて古い字形(甲骨文・金文)などをかかげた。

6. 意味

(1) 漢字のもつ基本的な意味や一般的な意味はもらさず示した。

(2) 意味が二つ以上あるときは、①②③……によって分け、それぞれがさらに分けられるときは㉑㉒……を用いた。

(3) 漢字の読み方によって意味が異なるものは、読みの上に□□……をつけ、さらに意味にも□□……をつけて、読みによる意味のちがいを区別した。

例 3 [出] (5) ㊦ □シユツ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

意味 ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(4) 意味らんの太字は「常用漢字表」に示された読み、またはその字についてのおもな読みである。太字にしたもののうち、歴史的仮名づかい・文語形のあるものは、その下に(ハ)につづんで示した。

(5) 意味のうち、わが国のみ用いられるものには、㊱の記号をつけて

この辞典の内容と使い方

意味らんの最後にかかげた。

(6) 固有名詞や専門用語など註の種類により、語釈の頭に【地】【人】【数】などの記号をつけた。(二ページ参照)

(7) 意味の、それぞれに対する同じ意味の漢字、反対または対応する意味の漢字があるときは、次の記号の下にこれをかかげた。

㊱……同じ意味の漢字

㊱……反対または対応する意味の漢字

また、①②……のいくつかに分かれた意味のすべてに対応するものは、その最後に一度だけ次のように示した。

㊱……

7. 人名

親字が人の名として一般に用いられる場合の読みを、意味らんの最後に㊱をかかげて、その下に示した。

8. 注意

(1) 注意

㊱ 異体字(正字・俗字・古字・同字など)を示した。(五ページ参照)

㊱ 字形が親字と似ていて、混同しやすいと思われる字をかかげた。

㊱ 「常用漢字表」で一字下げで示されている特別な、または用法のごくせまい音訓とその熟語例、及び付表語(熟字・当て字など)、ならびに読み書きするときに注意すべき点などを解説した。

(2) 注意

㊱ 同訓異字(同じ訓で読みながら意味の異なる漢字)、または同音異義の語で、使い方のまぎらわしいものについてその使い分けを説明した。(六ページ「同訓異字・同音異義語索引」参照)

(3) 注意

㊱ 漢文の読解に役立つよう、おもな「助字」の用法を解説した。

(4) 注意

㊱ 平仮名・片仮名の起源を示した。

(5) 注意

㊱ 平仮名・片仮名の起源を示した。

この辞典の内容と使い方

- (4) 従来の部首・画数を移動した漢字について、そのもとの部首と画数を示した。ただし、旧字体が示されているものについては省略した。

(ウ) その他、その親字について広く参考となる事がらをかかげた。

(4) 読み方

親字を一字目にもつ熟語で、読み方のむずかしいと思われる語、また、熟字訓や当て字などを五十音順にかかげた。

熟語について

1. 配列

(1) 熟語全体の読みの五十音順とし、読みが同じ場合は二字目の画数順、同音同画の場合は二字目の部首順によった。

例 【一同】(同) 6画

【一堂】(堂) 11画

【一道】(道) 12画

【名将】(将) 10画↓寸の部

【名称】(称) 10画↓木の部

(2) 派生語(ある熟語の下にほかの熟語・句がついて、一つの熟語・句となったものも含む)は、そのもとになる語のすぐあとに【】でかかげた。派生語どうしの配列は、全体の読みの五十音順とした。

例 【一挙】

【一挙一動】

【一挙兩得】

【後生】

【後生大事】

【後生畏るべし】

例 【末子】

【末子】

(4) 漢詩は、熟語の最後に配列した。

2. 見出しの出し方

(1) 意味が同じ熟語で、ほかにも広く使われる書き表し方があるものについては、本見出し熟語の下にかかげた。

例 【検死】—【検屍】—【情況】—【状況】

(2) 「同音の漢字による書きかえ昭和三十一年七月国語審議会報告」で熟語の書きかえとして示されているものは、次のような形式でかかげた。

例 【外郭・外廓】—【回状・廻状】—【臆測・憶測】

(3) 熟語見出しの漢字の上に、次の記号をつけて漢字の種別を示した。

△……常用漢字以外の漢字

◇……常用漢字ではあるが、その読みが「常用漢字表」に示されていないもの

例 【海上】

【海棠】

【海苔】

3. 読み仮名

(1) 熟語の下に、その読みを現代仮名づかいで、寄読みのものは片仮名、訓読みのものは平仮名で区別して示した。

(2) 一つの熟語に二つ以上の読みがある場合は、一般に多く用いられている読みを先にかかげた。

例 【馬酔木】

【人間】

(3) 読みがちがいによって意味もちがうものは、【】で分けて区別した。

例 【人間】—【人】—【人類】—【人】—【世】—【現世】。

4. 語釈

(1) 一つの熟語に意味が二つ以上あるときは、①②③……に分け、それぞれがさらに分けられるときは(1)(2)(3)……を用いた。

(2) 語の種類により語釈の頭に、【化】【法】……【人】【書】【地】【詩】

【古語】……などの記号をつけて語の種類を明示した。(二ページ参照)

5. 用例・出典

- (1) 語釈のあとに、重要な用例、よく使われる用例を「」の中にかかげた。用例文中の「」は、見出し熟語にあたる部分を示す。また、用例文のうちで、特定の意味をもつものや、むずかしいと思われるものには(「」)でかこんで、簡潔な訳をつけた。

例 【攻守】コウシュ せめぎあひするところ。――とあるを異にする(「立場がさかさまになる」)

- (2) おもな故事・成句、漢詩の一節などには、語釈のあとに△▽でかこんで、その出典名を示した。

6. 同意語、反対語・対応語

- 熟語の意味のそれぞれに対する同意語、反対語または対応語があるときは、次の記号をつけて語釈の最後にかかげた。

|| …… 同意語

↑ …… 反対語、または対応語

7. 注意、学習、参考

(1) (読み方注意)

- ⑦ 慣用読みのある熟語について、おもなものを注記した。

例 【消耗】シヤウコウ ……。(読み方注意)「ようぐ」ようぐと読むのが正しいが、現在では「ようもう」ようもうと読みならわされている。

- (4) 読みあやまりやすいと思われる熟語に対して注記した。

例 【育育】コクコク ……。(読み方注意)「うも」うもは育を旨と誤って読んだもの。

- (ウ) その他、見出し熟語の読み方に対して注意すべき事がらを示した。

例 【市立】シツリツ ……。「中学校」(読み方注意)「私立」シツリツと区別するために「いちつ」と読むときがある。

この辞典の内容と使い方

(2) (書き方注意)

- ⑦ 慣用による表記について、おもなものを注記した。

例 【捧腹】ボウフク ……。|| 抱腹ボウフク。(書き方注意)「抱腹」は誤用による慣用。

- (4) 書きあやまりやすいと思われる熟語に対して注記した。

例 【画竜点睛】カクリョウテンセイ ……。(書き方注意)「画竜点睛」と書き誤らない。

- (ウ) その他、見出し熟語の表記のしかたについて、注意すべき事を示した。

例 【一所懸命】イツショケンメイ ……。(書き方注意)

「一生懸命」は誤って使われたのだが、今では通用している。

(3) (使い方注意)

- ⑦ 副詞などの見出し熟語に対して呼応して使われることばを示した。

例 【全然】ゼンゼン ……。(使い方注意)あとに、「ない」ない「ません」ませんの打ち消しのこぼれくる。

- (4) その他、手紙に使われる用語など、見出し熟語の使い方について注意すべき事がらを示した。

例 【敬具】ケイグ ……。(使い方注意)「拝啓」ハイケイ「謹啓」キンケイになに対応して用いる。

(4) 同音異義語

- ⑦ 同音異義語で、使い方のまぎらわしいものについて、その使い分けを説明した。(ハルベージ「同訓異字・同音異義語索引」参照)

- (5) 参考 見出し熟語について、広く参考になる事がらをかかげた。

8. 逆熟語

- 熟語の最後に、親字が下についてできている熟語を◇印を付けてかかげ、音読みは片仮名、訓読みは平仮名で示し、五十音順に配列した。

例 ◇異体イタイ・遺体イタイ・一体イタイ・收体イタイ・解体イタイ ……

この辞典の引き方

漢和辞典で漢字や漢字を使ったことばを調べるには、まず「索引」で親字（熟語は第一字めの漢字）をさがす必要がある。この辞典では「音訓索引」「部首索引」「総画索引」の三種類があり、このうちどの索引を使ってもよいが、能率的な引き方を次にのべてみよう。

親字の音が訓がわかってるとき

「音訓索引」(一二ページ)を使う。たとえば「異口同音」を調べるには、まず第一字めの漢字「異」をさがす。「異」には「イ」の音と、「ことなる」の訓がある。これらのうち、どれか一つでも知っていれば「音訓索引」のページを開くと、

イ 異 六七一

ことなる 異 六七一

とあり、六〇七ページの一段めに「異」の親字があつて、「異」を第一字とする熟語がいくつかならんでいるので、これらを五十音順にたどつてゆけば、「異口同音」をみつけることができる。

親字の部首がわかってるとき

「部首索引」(表紙の裏)を使う。漢和辞典の親字は、すべて部首別にまとめてあり、その部首どうしは画数順に、同じ部首の中では部首を除いた画数順にならべてある。したがつて、もとめる親字がどの部首に属しているかがわかれば、表紙裏の部首索引でその部首のページを開き、さらにそのページにのっているその部首の部首別索引でその親字があるページをみつけることができる。

いちいちの漢字がどの部首に属するかを知るのは、はじめのうちはむず

◇ 部首のともめ方 ◇

(太字の部分は部首をしめす)

(1) 左右に切断できるもの

㊦ 左の部分で引くもの

仲冷唱埋始孫峠幅弦役快投潮猿防

旗晚服胸村残爆版牧珍礼町眠知砂

秋端被糧織耕聴船蛇解識豌購跡躡

転釈野鉄飲騎髓鯉齡配

㊧ 右の部分で引くもの

刈功形郡断料歌段辞隸雜頂印鳴親

(2) 上下に切断できるもの

㊨ 上の部分で引くもの

公冠安戾考発空答罹虎霜髮花京

㊩ 下の部分で引くもの

兄夏弊舞泰慕烈契姿導量益

(3) そのほかの部分に分けられるもの

㊪ 上左の部分で引くもの

原届疔病

㊫ 下左の部分で引くもの

延込赴麴魅

㊬ 内がわと外がわに分けられるもの

再凡包匠区国術開

かしいが、漢字のでき方がわかるとわかりやすく、興味もわいてくる。まず、右下のような方法で、だいたいの見当をつけてみよう。

親字の音訓も部首もわからないとき

「総画索引」(六〇ページ)を使う。総画索引は、親字の全部を漢字の画数(総画数)によって分けた索引である。したがって漢字の総画数さえかぞえれば、総画索引を引くことができる。たとえば、「毀譽」を調べる場合、第一字め「毀」の読みも部首もわからなければ「毀」の画数は十三画

親字に関するもの

この辞典に使った略号・記号

- 【】……常用漢字
- 【】……常用漢字以外の漢字
- 【教】……教育漢字
- 【常】……常用漢字
- 【人】……人名用漢字
- ※……「当用漢字表」になく「常用漢字表」にある漢字
- *……「当用漢字表」にあつて、「常用漢字表」にない漢字
- ③……漢音
- ④……吳音
- ⑤……唐音
- ⑥……慣用音
- ……読みによって意味が異なるとき、読みの頭と意味の頭につけて対応させる

この辞典の内容と使い方

熟語に関するもの

- 国……国語のみに用いられる意味
- △……常用漢字以外の漢字
- ◇……常用漢字であるが、読みが認められていないもの
- 【】……派生語
- ……読みによって意味が異なるとき、読みの頭につける
- ◇……親字が下についた熟語の頭につける

親字・熟語に共通のもの

- Ⅱ……同じ意味の漢字または熟語
- ↑……反対・対応する意味の漢字または熟語
- Ⅱ……意味が①②③……と分かるが、そのすべてに共通する同意語、反対語・対応語

語の種別・百科記号

- 《古語》……漢詩
- 《俗語》……人名
- 《詩》……書名
- 《人》……地名・地理
- 《書》……動物名・動物学
- 《地》……植物名・植物学
- 《動》……地質・鉱物名
- 《植》……物理学
- 《地質》……化学
- 《物》……天文学・天体名・暦学・気象
- 《化》……医学・病名
- 《天》……生物学・生理学
- 《医》……数学
- 《生》……
- 《数》……

であるから「総画索引」の十三画のページをみると、

とあり、五二〇ページの四段めの「毀」の熟語をさがすと、「毀譽」をみつけることができる。

画数は漢字によっては、ひじょうにまちがいやすいものもあるので、この辞典の総画索引は、とくに画数をまちがいやすい漢字については、正しい画数のところのほかに、まちがいやすい画数のところにも同じ漢字を出して*を付けておいた。

部首索引に関するもの

- 【仏】……仏教
- 【哲】……哲学・倫理学
- 【歴】……歴史・考古学
- 【経】……経済・商業・貿易
- 【法】……法律
- 【政】……政治
- 【文】……文学・国語
- 【文法】……国文法・文法一般
- 【美】……美術・工芸
- 【音】……音楽
- 【演】……演劇・映画・芸能
- ▽……部首説明
- ↓……その部首に属さないが、あやまって引かれると思われる漢字の正しい部首とページ数

